

## 季刊「権力」発行にあたって

一、人類の歴史上もつとも巨大でもつとも狂暴な暴力装置を相手に、世界革命の火ぶたはすでに切られました。ヴェトナムの英雄的人民によって点火された革命の焰は、アラブ、ラテン・アメリカの後進諸国人民大衆に引火し、いまや帝国主義諸国の労働者・学生に燃えひろがっています。

一九六七年から一九七〇年にいたる世界および日本の革命的激動は、その赤々と燃える焰の中に、アメリカ帝国主義を最終の拠り所とした史上最大のグロテスクなブルジョア国家権力の正体をくろくろと浮かび上らせ、同時にまた多分に忘れ去られていた革命的焰の論理を力強くよみがえらせました。それはまさに権力の問題を真正面から登場させたのです。

だが、帝国主義諸国での革命的権力闘争はいったんその勢いをせき止められました。敵権力の反撃のまえに東大・日大バリーグードはついえ去り、新宿に密集した革命的大群衆は散ってしまいました。日本ばかりではありません。フランスの「五月革命」は「ドゴールか混乱か」の恫喝のまえに屈し、イタリアの労学「底辺委員会」は、やはり権力のアメとムチ、すなわちCGILとの取引きと「底辺委員会」の弾圧のために一步後退を余儀なくされました。ヴェトナムの死闘が、自力でカンボジア、ラオス、タイへ戦線を拡大して、アメリカ帝国主義を疲弊させながらも、その勝利の展望をいまだ見出しえないでいるのもまさにそのためではないでしょうか。

われわれのまえに立ちはだかる権力の壁は、最終的には物理的な壁です。史上最大の暴力に打ち勝つ史上最強の革命的暴力の創出なしに世界革命は決して勝利しえないでしょう。しかし、権力の壁はいうまでもなく、たんに物理的な壁ではありません。大衆の革命的爆発そのものが、労働者・学生の陣列の中に温存されていた内部の敵によって体制内にイデオロギー的に吸収されてしまったことを、われわれは見落すわけにはいきません。われわれはみずからの思想的・理論的・組織的弱点を正し、まず内部の敵とみずからを区別し、これを粉砕することなしに、再び大衆の革命的爆発を勝ちとることもできないでしょう。そしてまた、このような激烈な内部階級闘争とおしてこそ、はじめて思想的・理論的・組織的に強靱な史上最強の革命的暴力―革命権力の創出をなしうるのであります。

したがって、権力の壁を打ち破り、世界革命が再び力強い進軍を開始するためには、一九六七年から一九七〇年に至る革命的実践の仮借ない総括と、そこから革命の総路線をきびしく練り直すことがいまや死活問題として問われております。

一、だが、じつはその作業はたんに一九六七―七〇年の革命的実践の総括を、一九六七―七〇年の総括としてやることで保証されるものではありません。そのためにはマルクス以来の、とくにロシア革命以降の世界の共産主義運動全体の根底からの洗い直しが要求されているといわねばなりません。なぜなら、共産主義運動はロシア革命後直面する死活の理論的実践的問題に対して答えず、たちまち山なす困難に圧倒されて、官僚主義的行政的抑圧と商品経済的譲歩のジグザグという重大な逸脱へと追いこまれ、変質していき、この変質した労働者国家と共産党が、帝国主義世界の中にみずからを体制内化する弁護理論・イデオロギーを発酵させ、のちに続く革命の士気を深く喪失させ、抑圧し続けたからであります。しかも、現在新しく登場してきたいわゆる新左翼が、そうした事実に対する即自的反発から革命的精神と行動のダイナミズムをある程度回復しながら、即自的反発を透徹した理論的批判に止揚しえておらず、したがって内部の敵を真に克服し、一掃しえないばかりか、権力の壁に直面して、みずからが一方では真に止揚しえていない既成左翼の理論や組織慣習をプラグマティックに採り入れて同化をはじめ、他方ではだらしなく無力なアナキズムに流れていこうとし、老いやすく、みずからが運動の障害物、内部の敵に転化しようとして

いるからであります。

真の革命的左翼は、一九六七―七〇年の革命的激動の総括を共産主義運動全体の総括とおして明らかにし、こうした状況そのものを止揚しなければなりません。まさに革命的理論なくして革命的行動はありません。

一、われわれはこうした作業が現在焦眉の急となっていると考えます。

こうした客観的要請を背景として現在すでに日本および世界の幾多の理論誌が発行されています。そしてそれが世に問うた論文の中には、去勢されたアカデミズムやスターリニズムの文献にない多くの鋭い閃きがあり、それらが読む者の心を打ちます。しかし、それらはまだほんの閃きでしかありません。理論は全体的体系的であることを要求されます。なぜなら、われわれの革命は、これまでの革命とは異なり、対象全体を変革しようとするものだからです。だが、果してそれらはこの基準に耐えうるでしょうか。しかも、それらの閃きでさえ、現実の闘いの行き詰りの中で、多くが心情的で非合理的な符号やちくさいセクトの弁護論に流れはじめているのではないのでしょうか？ 悪いことに、こうした鋭い論文を含む理論誌もまた運動の現状を反映して、一部はセクトの理論機関紙であり、狭いセクトの利害の擁護に奉仕しており、他の一部は反セクト的だが、ノンセクト的気分迎面しつつ、革命そのものまでを商品化する代物に堕ちはじめてはいないでしょうか。

一、われわれ編集委員会は、このように現在焦眉の急として要請されているながら果されていない作業の遂行を主体となつて真正面から担おうとするものです。

だが、こうした作業は、その内容からいって狭いセクトの利害の枠にはまるものではありません。本来共産主義を志すすべての者にとつて、普遍的な課題にほかならず、すでに心ある人たちがそれぞれ独自に追求をはじめていることにほかなりません。

そこで、日本および世界のすべての共産主義者にわれわれは呼びかけます。諸君の最良の理論的成果と非妥協的な理論闘争とをもって参加されよ、と。諸君、光榮ある課題とともに担おうではありませんか？

「権力」編集委員会

季刊「権力」発行計画の概要

一、名称

「権力」とします。

一、編集方針

革命運動の課題に真に応えるにふさわしい理論的硬さ、自由なダイナミズム、仮借ない理論闘争

——以上の三つを本誌の基調とします。

一、編集委員会

編集上の一切の責任を負うものとして編集委員会を設けます。

編集委員会はさしあたり川上忠雄を代表とする若干名をもって発足させますが、右の季刊「権力」発行の趣旨に賛同される個人、またはグループの積極的な参加を期待します。

なお、編集委員会の連絡事務所を船橋市高根台町五―一―二、公団二六六―三〇五川上方（電〇四七四―六六一―九三八四）に置きます。

一、執筆者

有意の諸君の自発的参加を建て前とします。

一、発行主体

風媒社（名古屋市中区不二見町七一、久野ビル内、電名古屋三三一―〇〇八）を発行主体とし、これが営業上の一切の責任を負います。

なお、編集上の事務取扱一切は編集委が行ないますので、連絡は前記編集委の連絡事務所へお願いします。